

その昔、城下町として栄えた勝山は、岡山県北部の旭川沿いに位置する。この地の利により、江戸時代（1603～1867年）、勝山は商業の町として大いに繁栄した。旭川により、このエリアの木材産業地帯から下流の港まで木材を容易に運搬することができた。一方、他の物品の輸送には、出雲街道（西日本の日本海沿いの都市と、兵庫県南部の姫路の街とを結ぶ交易路）沿いの陸路も使用された。

勝山の商人は、本通り（現在の町並み保存地区）沿いに、美しい家、店、倉庫を建てた。互いにかみ合うセラミックの屋根瓦、木の細長い板でできた壁、白い漆喰の正面構造を特徴とする2階建ての建物が、狭い道路沿いに建ち並んでおり、各店の正面が、舗装された道路に面している。鋭い観光客であれば、壁にある装飾的な漆喰のレリーフ、鏝絵や、切妻の装飾物、鴟尾に目が留まるであろう。鴟尾の彫刻作品は、竜などの神獣を描写したもので、火除け意味があるとされている。時折車が通る以外は、過去1世紀にわたり、町の景観の大部分が変わらず残っている。

勝山の独特な特徴がもう1つあるが、これは、かなり現代的なものである。至る所にある、のれんと言う、店頭のカラフルなカーテンである。伝統的に、これらのカーテンは、店の扉の外に掛けられ、店が営業していることを示すために使われてきた。半身ほどの長さで、しばしば広く市販されている。しかし、勝山ののれんは特別だ。すべて、地元の染織家、加納容子氏が手掛ける、独創的な、草木染の手工芸品である。彼女は、各店のオーナーと共に、それぞれのビジネスを体現するイメージをデザインする。中には、湯気をたてる1杯のコーヒーの周りで豆が踊っているデザイン（カフェ向け）など、具体的な描写もある。しかし一方で、オーナーの精神を表現するような、また、観光客の気を引き入店を促しつつも、表現から業種を想像することができるような、抽象性の高いイメージを取り入れる場合もある。例えば、一面の緑の中で、ほろ酔いの小さな鬼がしゃがんでいる、というようなデザインだ。（このデザインは酒場の意味になる。）

伝統的な建築を背景に、活気に溢れたのれんを見ながら本通り沿いを散歩しただけでも、勝山に来て良かったと、十分な喜びを得ることができる。しかし、店内でもまた、面白い体験が待っている。ある200年来の造り酒屋には、ショップと食事処が設けられ、観光客を迎え入れている。ギャラリーには、地元の芸術や、竹で編んだ籠などの手工芸品が展示されている。お土産ショップでは、蒸したての酒饅頭（酒と小豆あんが入った伝統的な丸い菓子パンのようなもの）が販売されている。そして、アトリエでは、加納容子氏に会うことができる。彼女は、体験型の、染色のレッスンを実施したり、他の場所では絶対に買えないユニークなお土産となるオリジナルのれんをデザインしたりしている。